

シンポジウム 1：これからの認知症ケアと在宅医療

演題名	ライフサポートの架け橋をつくろう！
-----	-------------------

概要

■はじめに

大牟田市の人口は、約 12 万、高齢化率 31%。かつては炭鉱で栄えた町は、今では認知症のまちづくりの先進地と言われている。平成 13 年度に認知症ケア研究会、翌 14 年度より「地域認知症ケアコミュニティ推進事業」がスタートし、「認知症になっても、誰もが住み慣れた家や地域で安心して豊かに暮らし続けることができるよう、地域全体で認知症の理解を深め、認知症の人と家族を支えるまちづくり」を目指してきた。

■地域認知症ケアコミュニティ推進事業

常に行政や事業所、多職種、地域全体の協働のスタイルを生み出しながら、徘徊模擬訓練や小中学校の絵本教室、もの忘れ相談検診・予防教室、若年性認知症の当事者交流会、介護家族の集い・語らう会、認知症何でも相談窓口など、さまざまな活動を展開してきた。平成 21 年度からは、専門医と認知症コーディネーターによる地域認知症サポートチームをつくり、地域包括支援センターと一体となって、医療と介護の両面から適切な支援ができるようにと、困難ケースのカンファレンスや若年性認知症支援、家族支援などの役割を担っている。

この事業は、認知症になる前から認知症の理解を深め、予防に取り組むと同時に、早期からの診断、支援、変化点が生じた時に医療と介護の両面からしっかりとサポートする専門チーム等のしくみをつくり、人生の最期の瞬間まで、住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けられるように、さまざまな介護サービスの現場に、パーソンセンタードケアとライフサポートの視点を持った人材を育て配置するというもので、大牟田式オレンジプランとも言える。

■認知症コーディネーターの育成

それらの担い手となっているのが、認知症対策の核となる人材として、平成 15 年度より大牟田市が独自に養成してきた認知症コーディネーターである。認知症ケアは、認知症の人の尊厳を支えていくところにこそ意味があり、認知症に関わる様々な知識・技術とともに、人間観や理念をしっかりと備えた人材を数多く養成し、医療の分野も含めて、認知症の人が関わるあらゆる場所に認知症ケアを学んだ専門職の育成を、行政の責任として推進してきた。研修は、市の認知症支援の課題を色濃く反映しており、これまでに 9 期 85 名が修了、現在 10・11 期生が学んでいる。平成 24 年度の修了生の実態調査から約 8 割が事業所や所属部署における認知症ケアの向上、介護と医療の両面からの支援、多職種連携等の役割を果たしているという結果だった。頻繁な徘徊により入所を迫られた独居の高齢者を CM や医師、地域住民、中学生、認知症コーディネーター修了生、地域包括支援センター等がチームとなって支え、在宅生活を継続している例はその中の一例である。

■おわりに

医療連携、多職種連携の重要性が頻繁に指摘されているが、情報連携や措置連携にとどまっている実態も少なくない。さまざまな変化点が生じて、可能な限り本人が望む暮らしを続けられ

るために、今後かかりつけ医や訪問看護ステーション等の在宅関係者との連携強化を図り、ライフサポートの架け橋をつくっていきたい。